

## 過疎化と地域生活の再編

——奈良県吉野郡上北山村西原字天ヶ瀬を事例として——

松崎 憲 三

- 一、はじめに
- 二、民俗学における過疎化現象への対応
- 三、過疎化と地域生活の再編
  - (1) 上北山村西原の概観
  - (2) 集落の立地とムラの開発伝承
  - (3) 集落と耕地・山林
  - (4) 道路の敷設と民俗の変容
  - (5) 下西への移転
  - (6) 天ヶ瀬組の祭祀・信仰
- 四、結びにかえて

### 一、はじめに

郵便局に置いてあるカタログを見て、全国各地の名物を注文し、郵便小包で郵送してもらおうという郵政省の「ふるさと小包」がすぐぶる好調とい<sup>(1)</sup>う。こうしたシステムは、村起こしの一環として大分

県知事によって提唱された、一村一品運動に触発されて創出されたことはいままでもないが、その好調ぶりは都市人の故郷志向がいかに根強いかを物語っていると見えるだ<sup>(2)</sup>らう。こうした都市人の心意を逆手にとって「コシヒカリ稲刈ツアー」「雪オロシツアー」「杜の賑いバック」等のパッケージツアーが、国鉄や各観光業者によって企画され、これも盛況をきわめているといわれる。某観光社による「杜の賑いバック」は、各地域の種々の文化団体に働きかけ、また自治体の協力をもとりつけた上で、一〇〜一二種類の民俗芸能や行事を一堂に集めて見せるというもので、いうなれば町ぐるみ、村ぐるみの大伝統文化祭である。しかも、地元文化のPRにもなり、一方旅行者も楽しめる一石二鳥の企画であると説明<sup>(3)</sup>されている。こうした類の商業ベースに乗ったパッケージツアーは枚挙に暇が

ないが、中でもユニークなのは、都会っ子の山村留学だろう。こうした方式は、一〇年前に長野県北安曇郡八坂村で始まった試みで、夏の間都会っ子を過疎の学校に迎え入れるというものである。自然の持つ教育機能に改めて着目し、長期の留学を地元家庭で生活しながら体験する。「豊かな自然とゆとりを」という都会人と、「村に活気を」という村の人達の願いがかみ合ってこの山村留学は広がる一方である。そうして国土庁は、昨秋スタートさせた第四次全国総合開発計画に山村留学制度を組み込んだともいわれている。<sup>(4)</sup>

昭和四十年代後半以降、いわゆるオイルショックを契機として、これまでの高度経済成長政策の大転換が見られ、資源問題や食料問題との関連で、生態系の循環や人間と自然との調和が強調され、身近な生活環境や地域社会のあり方が重視されるようになった。そうして村落と都市を通じての「地域社会の解体と再編」が時代の中核的問題となり、<sup>(5)</sup>国土庁の計画は、こうした動向の中で生まれたものといえよう。

一方、地方行政レベルでも、様々な形で地域社会の再編・再生が図られている。過疎村落側から見れば、先に引用した一村一品運動もその一つだろうし、<sup>(6)</sup>富山県東砺波郡利賀村や福島県南会津郡檜枝岐村のように「別世界の異文化」だった演劇を過疎対策に利用し、共存共栄の道歩んでいる例も見られるという。<sup>(7)</sup>また、落人伝説で

知られる宮崎県東臼杵郡椎葉村では、一昨年の平家滅亡八〇〇年を機に、シンポジウム・民謡大会・物産品評会・平家祭を含む一大イベントを企画し、村起こしの起爆剤たらしめようとし、その効あつてか(？)、村の若者達で焼畑を復活させようという動きも見られるようになった。その行方は定かではないし、利賀村・檜枝岐の例にしても、実際の村の活性化にどれほど貢献しているかは未検証といえよう。しかし、村人が主体的に生活そのものの意味を考え直していることとする気運が生まれてきたことは確かであり、そうした意味では各地域毎に様々な試みがなされてしかるべきだろう。

従来民俗学は、過疎化の進行している地域をフィールドとする傾向が強かった。なんととなれば、そうした僻地<sup>(8)</sup>であればこそ民俗が保持されており、効率的な調査が可能と考えたからにほかならないし、急激な社会変動に伴って変貌・消滅していく民俗をとるものもとりあえず調査・記録しておかなければならないという危機感からそうした傾向にならざるをえなかったのも確かである。とはいえ過疎問題を正面から取り組むことはなかったのであり、こうした各地域の動向に対応する術を持ち合わせていなかった。問意こい話ではあるが、利賀村等ドラステックな解決方法を導入した地域ばかりでなく、伝統的な生活スタイルを新しいものに置き替えてつづも、その地域ならではの対応を示している地域の変容過程を、微視的・

組織的に検証していく作業から始めなければならない。そうした意味で、近畿経済圏の周辺に位置する奈良県吉野郡上北山村西原（宇天ヶ瀬）をとりあげて検討を加えてみたい。とはいえ、本調査終了時点に至ってようやくこうした問題意識が浮かび上がったのである。そうした視点からの調査は充分行なわれていない。それ故小稿はきわめて中途半端なものとならざるを得ないが、筆者の取り組み姿勢だけは示しうるものと考えらる。

ところで過疎と過密は高度経済成長による地域の不均衡発展がもたらした双児の落とし子であり、過密地域とその対極をなす過疎地域からの視角が交錯的に加えられてこそ、適切な地域生活問題の把握が可能となる。<sup>(8)</sup> 両視角からの接合が、どのような形でなされるかの展望は未だ持ち合わせていないが、これと併行して過密地域盛り場の研究を進めていることを申し添えておく。<sup>(9)</sup>

## 二、民俗学における過疎化現象への対応

民俗学の報告書は『〇×の民俗』というように、対象地域の地名を冠するのが普通であるが、珍しく『過疎村農民の原像』と題する山口弥一郎のモノグラフがある。<sup>(10)</sup> 過疎村の荒廃を憂慮した上で、はしがきに次のように記している。

生活の向上発達、急変もよいことであろうが、生活文化はもちろん積み重ねの上になされてゆくものであるから、その地域、地域で築きあげられた郷土的、土とのつながりのある生活を黙殺しての、移入帰還者のみでの復興は容易でない。特に土と離れた人間の心の荒みなどは、とりかえしようもないものであるから、日本固有の生活、精神には、多くを削り、改めるべきものの多いのは致しかたないとしても、一筋だけ日本人としての心の生活の確たるものを通しておきたいと願う。それが私などを五十有

余年、東北地方の研究生活に投じた熱意念願にほかならない。この山口の発言は、民俗学に取り組む彼の姿勢と使命感を吐露したものであるが、一方では多くの民俗学徒の心情を代弁していたといえよう。しかしながらとどのつまりは、伝統的習俗を書き止めておくことで終わるのである。南奥羽地方を対象とした山口のモノグラフは、ユニークな構成による優れたモノグラフの一つであることは確かである。しかし、過去に村落生活の理想型を求めようとする姿勢にそのまま賛意を表する訳にはゆかないし、また急激な社会変動に対応して民俗は変容しているのであり、そのプロセスを捉える視点が欠落している点に問題を残したといえる。だが、この点については山口のみを責める訳にはいかないだろう。

桜田勝徳は戦後の急激な民俗変貌を眼のあたりにして、いち早く

従来の民俗の調査方法の再検討を促した<sup>(11)</sup>が民俗学徒の反応は鈍く、一九八〇年に至ってようやく、大塚民俗学会年会シンポジウムにおいて「民俗の変貌をめぐる」なるテーマでこの問題が取り上げられた<sup>(12)</sup>。当然ながら「変貌」の概念規定と方法論をめぐる論議が交わされたが、シンポジウムという性格上議論が充分かみ合うに至らなかった。過疎あるいは民俗の変容といった課題に対し、初めて方法論的検討を加えたのは高桑守史だろう。高桑は民俗変容の要因として(1)技術革新や発明品の導入、(2)国家権力による統制や介入、(3)地域社会の生活構造が何らかの理由により構造変革を遂げた場合、の三点を上げ、(3)の典型が過疎化現象に伴う民俗の変容にほかならないとした。そうして、従来の民俗学の目的・方法・概念などの基本的問題の再検討とともに、民俗学が民俗変容の問題に早急に取組むべきことを主張した<sup>(13)</sup>。

民俗学は、いわば変化を通して持続性を考察する際にその力を発揮しうる学問であり、重出立証法・方言圏論といった資料操作法も、民俗を構成する要素の変化を前提として有効性をもつものである。従って民俗学はまさに民俗の変化の足跡をたどることによって成り立ってきた。

ここで「変化」あるいは「変遷」、「変容」「変貌」といった語彙の持つ意味を整理しておくことにしよう。「変遷」というのは同質的

な文化なり民俗の変化をいい、「変容」もしくは「変貌」とは異質な文化・民俗との接触による変化をいう<sup>(14)</sup>。民俗学は同質なもの前提に、起点からの変化を追い続けてきたのであり、従来の方法論では民俗の変容に対処しきれないことはいうまでもない。そうした意味から高桑が、民俗の変遷と急激な民俗事象の変容を区別して扱うことを主張した点は頷けるのであるが、高桑自身はその具体的方法を提示しなかった。

一方、富田祥之亮は高桑の見解を受けて、生業を指標に、平坦部稲作地域の滋賀県東浅井郡浅井町高畑・谷口と、山間部畑作地域の徳島県名西郡神山町寄居・左右内の四地域を選び出し、数量化三類なる統計解折法を適用することにより、先ず戦前から現代に至る民俗事象の変容をたどろうとした<sup>(15)</sup>。それによれば、

(1) 儀礼的な交際・贈答などの「つき合い」は比較的变化が少なく、時代に対応した変化はしているものの形態的には現在の生活に根づいて存在している。

(2) 共同的な対処を示す「自治活動」に分類された民俗事象の変化は、主に生活・生産の技術変化によるもので、水利施設の整備と番水制度との関係、道路の舗装と道普請の関係等々に示される変化である。

(3) 「まつり」では特に価値意識の変化、社会構成の変化(例えば

雨乞いと科学教育の関係、若年層の流出によるまつりの担い手の減少)などが関係深い変化要因として類型化された。

(4) 「くらしの互助」の民俗事象では、大部分は消滅したり、他の類型と比較して変化の程度が著しい。結婚式の会場が常設の結婚式場の利用となり、イエヤマラの外へ出てゆき、それに伴う料理づくり等の相互扶助もなくなった。農業生産におけるニイヤテマガエも、農協等の生産組織の農作業の受託制度や金のかかる農業機械の導入によって見るかげもない。自給自足的な体制から市場経済システム依存への転換が顕著といえる。

以上の指摘は、成城大学民俗学研究所の『山村調査』に対する追跡調査、『山村生活五十年、その文化変化の研究』による各地域の分析結果と軌を一にしたものである。<sup>(16)</sup> 富田は民俗変容の一般的傾向をこのように把握した上で、次に上記四地域について「オコナイ」あるいは「焼普請手伝い」を中心に民俗事象の構造的特質を拾い出しつつ、その変容過程をたどるという方法をとるのである。富田の究極的な目的は、「民俗事象の選択過程や選択の価値基準そのものに地域文化の固有の伝統がかかわっている」との前提に立って、その地域ならではの变化への対応を把握することにある。<sup>(17)</sup> 筆者流に言い替えれば、個別分析法・地域民俗学に徹して、地域性把握に努めるといふことになるのだが、都市化・過疎化による民俗変容を捉え

る現段階の最も有効な方法のように思われる。ただし富田のように「オコナイ」なり「焼普請手伝い」といった特定のテーマに焦点をしばってアプローチする方法もありえようが、一応「畑作農村の民俗誌的研究」と銘打っており、地域なり集団の担う民俗の全体像を分析的に捉えて体系化したものが民俗誌であるとするならば、より総合的視点からアプローチする必要がある、以下の分析指標を設定した。

1 生態的側面 (a) 生活環境及び生業形態・土地利用の特質とその変容

(b) 住居・物的諸施設の空間的配置状況の特質とその変容

2 社会的側面 (a) 社会関係、集団・階層構成の特質とその変容

(b) 人口量、人口構成等の特質とその変容

3 宗教観・意識 (a) 他界観・信仰の特質とその変容

(b) 地域住民の社会的性格、連帯性の強さ、統合の程度とその変容

いずれにしてもその究極的目的は、各地域の個性の抽出を通して人々の心の動きとその力学を解明することであり、これは民俗学の求めるものと何ら異なる訳ではない。

ところで過疎の概念規定については、人口論、社会論、経済論等

三つの側面からの捉え方がある。<sup>1)</sup><sup>8)</sup>

(1) 人口論的過疎—地域において自然増加率を低下させるようになった状態

(2) 社会論的過疎—人口の減少が地域社会における生活の維持を困難に至らしめた状態

(3) 経済論的過疎—人口の減少が生産活動の低下を招いた状態

これらを要約すると、過疎とは人口減少が地域の社会的経済的機能の低下、発展の停滞を招いた状態といえる。

さて、以上を前提にいよいよ奈良県吉野郡上北山村西原の分析に移るが、その前に地理学を中心とする隣接科学の、当該地域における過疎化問題への対応を概観しておくことにしよう。

紀伊半島中央部は中央構造線の外帯部に位置し、急峻な峡谷的地形を示すとともに降雨量も多く、ダムの立地に適することから近畿圏のダムはこの地域に集中している。これらの大半は昭和三十年代から四十年代にかけてその完成を見たものだが、その中でも最初にダム建設の進められたのはこの地域を南流する十津川・北山川流域である。紀伊半島中央部といってもイコール奈良県吉野地方といえる程であり、主だったダムの三分の一は吉野地方に立地している。従って先ずこれらダム建設による地域生活の変貌がクローズアップされることになった。堀井甚一郎は「吉野熊野総合開発計画」(昭

和二十七年制定)に伴う奥吉野山村の変貌を、集落の移転状況を中心に概括的把握を行なった。<sup>19)</sup>一方西野寿章は、奈良県十津川村迫と福井県今庄町広野二ツ屋といった二つの水没部落をとりあげ、その移転形態の相違を村落構造の反映として捉えた。すなわち、明治中期の段階で階層性を明らかに示し、同族結合村落的性格を示した十津川村迫の場合、その後の林業を中心とした経済活動の中でその村落構造が弛緩することなく水没時まで存在した。さらに特に婚姻関係による家々の結びつきが強く作用した村落社会の形態が、補償交渉の段階で慎重派と促進派という形で分裂し、結果として分散的移転形態を示すに至った。一方、広大な入会林野と共有田を背景に講組結合村落的性格を示した今庄町広野二ツ屋は、家相互の結びつきが部落の共同原則を維持させてきたこともあって、補償の段階では決して良い条件であったとはいえないが、分裂することなくほぼ集団移転という村落再編成を果たしたという。<sup>20)</sup>民俗学の場合もダム建設に伴う水没村落を対象とすることはしばしばあったが、再三述べるように項目調査による記録作成に終始し、西野のように村落の水没とその再編というダイナミックスを取り扱う観点と方法論を欠いていた。その意味で西野論文は地理学の視点から一つの示唆を与えたものといえよう。ただし民俗学側の唯一例外として、(滋賀県永源寺町愛知川ダム建設をとりあげたものだが)、水没村落の再編成

過程を、宮座組織の詳細な分析を通して把握しようとした花島政三郎の業績があることをつけ加えておく。<sup>(22)</sup>

以上がダム建設という国家的事業によって衝撃的な解体（挙家離村）を余儀なくされた村落を対象としたものであるのに対して、日本中を席捲した高度経済成長によって徐々にむしばまれていったいわゆる過疎村落を扱ったものに、文化人類学者米山俊直の『過疎社会』がある。<sup>(23)</sup> 米山は吉野郡大塔村のインテンスイップな調査を試み、過疎化現象のメカニズムを明らかにするとともに、適疎社会の構築を目指して、(1)ムラの過去を追わない、(2)個人の選択を尊重する、(3)生活は都市との平等を目指す、(4)新しい血を入れる等の提言を行なった。この米山論文については、以下西原の分析を行なう過程で必要な限りにおいて検討を加えることとする。

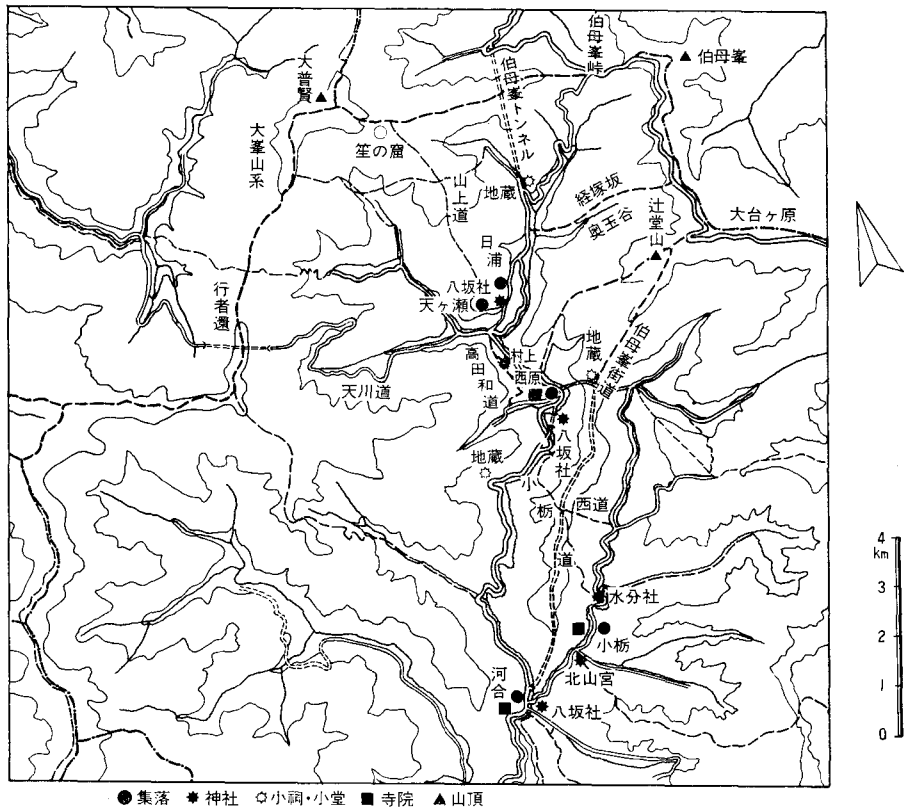
### 三、過疎化と地域生活の再編

上北山村西原は天ヶ瀬・日浦・細原・小原・泉の五つの集落から成り、天ヶ瀬と日浦は他地域から北へ四キロの地に位置して村組名を天ヶ瀬組と称している。この天ヶ瀬組に対して残りの三集落を三組と呼んでいる。三集落各々が村組を形成していたと思われ、現在戸数の増えた細原は上細原と下細原とに分かれた等々の変化を来し

ているが、三組の呼称そのものは生きている。小稿はこのうち天ヶ瀬組に焦点を当てて分析を試みるものである。天ヶ瀬組は明治末、大正初期には一七戸を数えたが、過疎化の波に洗われて一戸二戸と減り、昭和五十八年十一月、最後まで頑として移転しようとしなかった一軒も遂に三組の集落へと移り、天ヶ瀬・日浦地区は廃虚と化した。この天ヶ瀬組の生活史を能う限りトレースするとともに、同じ



写真1 天ヶ瀬の廃屋



●集落 ●神社 ○小祠・小堂 ■寺院 ▲山頂  
 図1 上北山村略図

大字内とはいえ三組地域への移住後どのような生活を送っているのか、天ヶ瀬組としての意識が日常生活の中でどのような形で保持されているのか、あるいは三組へ全く同化してしまったのか等々に留意しつつ天ヶ瀬・日浦地区の過疎化とその対応について考察するつもりである。

(1) 上北山村西原の概観

吉野山地はいわゆる外帯に属する紀伊山脈の中枢部を占めている。この山地を刻む主な河川は吉野川・十津川・北山川であり、これら河川の本・支谷に沿って集落が散在している。北山川流域地域は十津川流域とともに奥吉野の一部をなすもので、西原(天ヶ瀬)は北山川の最奥部にある。この地域は、西の大峯山地、東の大台ヶ原山地に挟まれ、北は吉野川上流と分水嶺をなす伯母峯峠で限られている。「北山」の呼称は紀州熊野方面よりの呼び方で、南に展開する同地方と経済その他の結びつきが強い。行政的には中・近世を通じて北山郷と称されたが、北山郷は北山上組、北山下組の二組より成る。延徳二年(一四九〇)三月の施入の滝川寺大乘経奥書には「和州吉野郡神河三村」と記されており、「三村」とは西野村、川合村、小瀬村をさし、この神河三村がのちに北山上組となったものである。神河



三村の一つ、西野村が現在の西原であり、明治十五年（一八八二）宗川郷西野村（現西吉野村）と区別するために改称されたものである。慶長郷帳には村名は見えず（北山村内に含まれる）、寛永郷帳に初めてその名が現われ、四六戸、村高約二六石、幕府領となっている。のち、延宝検地によれば村高約五七石となった。<sup>(24)</sup>

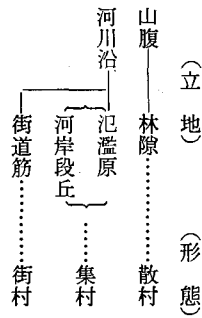
宝永年中（一七〇四）幕命によって編述された『北山郷由緒書上組』に

北山郷発端之儀者極深山嶮之悪所、年々十月上旬より翌春二月上旬迄雪降積山稼等難出来都而作物実乘不宜土地柄、然ル処往古諸方より立越堀込柱之小家掛等ニ而往居致し、此深山谷間江銘々追々畑地切開耕作渡世を専ニ致し、御地頭之御政事も無之、食物者栃之実、榎之実、木之芽等之類多分取入貯置雑穀食用之足為致し、当日を相凌い極難渋之場所ニ罷在、諸色売冗之場所江者行程廿五六里相隔、紀州浜筋江者難所二日路有之、都而不弁理之場所ニ而自然ニ田畑開発丹誠を尽し得共当時之人家ニ割合いハ、耕地格外之不足いたし、尤当所産物木材并茶類を専らとす<sup>(25)</sup>とあり、上北山村の開拓の歴史と土地柄を窺い知ることができる。こうした山峽にも中世来、諸所方々より人が入り込んで住を建て、おそらく焼畑耕作によるわずかな畑地と、用水取得の可能な猫の額大の低湿地における水田経営を行なった。当然これだけでは食

えず、栃や榎の実を常食とせざるを得なかったのである。また由緒書に「尤当所産物木材并茶類を専らとす」とある茶についても、茶畑といえるものはなく、もっぱら畑のキシ（畔）に天然生のを自家用として栽培したにすぎない。<sup>(26)</sup>一方の林業であるが、文禄元年（一五九二）豊臣秀吉が京都伏見城の晋請を行なった際に北山郷への用材の注文があり用材を供出して以後「御材木所」となり、北山郷の山働きは柚役なる役付となった。江戸時代に入っても幕府直領として「御材木」と称する木材を上納した。当初モミ、ツガ等の天然林の伐採に終始したが、元禄・享保の頃より里山における上納木材が欠乏するに及んで人工植栽が始められた。焼畑跡地に自生のスギ・ヒノキの苗木を集めて移植生産し、また天然林内の自生の樹木<sup>(27)</sup>に手を加えて育成した。これが北山郷の人工造林の始まりであり、川上村の吉野林業（密植、除間伐励行、長伐期撫育本位）に対して北山林業（疎植、粗放、なすび伐り伐採<sup>(28)</sup>）と称されるに到る。いずれにせよ、上北山村全体は林主農副の村であり、いうまでもなく西原も「皆材木を食べて大きくなった」といわれるように、伝統として商業的林業を持つ反面、農業へのウェイトが非常に低い村落といえる（なお、これらの生産基盤については小川直之論文を参照されたい）。

(2) 集落の立地とムラの開発伝承

集落はふつう自己の生活条件を充足する地理的最適地に選定立地し、集落形成後その社会的、経済的変動に対応して領域を拡大もしくは縮小する等々の生態的变化を来す。従って集落はそれぞれに個性のある発達をとげているのであり、自然的基礎、社会環境の相違、発展段階の相違その他によってその形成も異なる。<sup>(28)</sup> 吉野山地の集落を立地の環境と集落形態を指標に大雑把に類別すれば、およそ以下の如く捉えうる。



そうして西原は、現在街道から山腹にかけて家屋が分布しているが、街道のつけ替え（東熊野街道→国道一六九号線）、改修等に伴って山腹から下る傾向が強くなったもので、現在街道筋への密集が際立っている。一方西原の北に位置する天ヶ瀬も、元来の西原集落同様標高七〇〇メートル前後の山腹に住居が展開しており、先に示した林隙村に相当する。林隙村とはV字谷の急峻な谷壁の森林を切り開いて畑を作り、家を建てて村造りしたと思われる村落で、この

種の村落は隠田百姓村的性格を持つものが多いといわれている。<sup>(30)</sup> 北山谷にも平家の落武者が入り込んだといわれ、現に西原には「七卿落ち」の伝説が残っているし、平家のみならず、南北朝の抗争、これに続く長祿の変<sup>(31)</sup>のおきた前後に相当数の武士が入り込んだ模様であり、やはり西原に南北朝の遺臣大平宗助に関する伝承も残されている。<sup>(32)</sup> 西原にある宝泉寺等の住職をつとめた林水月の明治三十五年記載の「大平宗助の事」なる文書は次のように伝えている。

吉野郡上北山村大字西原に於て古老の口碑をきくに大平宗助は南朝の遺臣にして自天親王（北山宮）を追慕しはるはるこの山中にたずね来り白瀧より三町ばかり上において車僧<sup>(33)</sup>と出逢い王子の薨ぜられたることを聞き慨嘆のあまり杖を「逢い所」（今の逆柱）に挿みそれより和泉の奥に入り草庵を結び里に出ずして此処に終るといふ。此の地今大平タヒラと称す。

昔時上西某氏此地を開墾せし時土中より古鏝を掘り出し之を宗助の霊となし和泉の里より四、五町奥に小祠を建てて大平神社と称しその霊を祭祀せり。また一里半ばかり下の河合領小谷橋を奥に入る凡そ十八町ばかりの処に西山観音という小祠ありこの辺にも既往宗助宮と称する祠ありしも之を廃して河合区の村社に合祠すという。安政年間の頃まで平四郎といえる人西山に住居して此祠を守護するといえり。且つ大平宗助の末裔なりと云い伝えり。創

立未詳なるも和泉の奥なる小祠に納めてある古き棟札を見るに左の如く記しあり。

奉 造宮 大平御社

干時 宝曆拾四年甲申六月廿日 鳥居同時建

木道具えのぐ三組寄進 御祝六月二十一日

宿和泉傳右エ門 西野邑年寄平平

大工熊野大居 小野善七

長岡政右エ門建之 行年卅八才

この大平神社は現在西原の八坂神社に合祠されており、河合の大平様ともども信仰を仰いでいる。しかし、それ以上に興味深いのは西原及び天ヶ瀬の開發先祖を祀る村上様に関する伝承である。西原と天ヶ瀬を結ぶ山腹を走る旧道の間地点に小祠二社があつて、一方を村上様といい、岩本家の先祖山葵太夫と仲村家の先祖奥玉太夫を祀るものといわれる。山葵、奥玉ともに谷名に相当し、当初各々の谷筋に居住しやがて天ヶ瀬に移つたとされるが、両者と七卿とのかわりは判然としない。また一説には岩本家の先祖と泉の大谷家の先祖・大谷帯刀を祀ると伝えられ、祠には短刀が御神体として祀られており、短刀の袋に「岩本氏」、刀には「泉生□□」とあるが後者はサビで判読できない。いずれにせよ、御神体の銘より、西原で最も古く開發されたと思われる泉と天ヶ瀬の先祖を、両地域の中



写真2 村上様

間地点に祀つたものと考えられ、それを裏付けるかのように祭日には村の役職（多くは天ヶ瀬と泉から選出されたといわれる）と両地域の人々が列席したと伝えられている<sup>(33)</sup>。また、天ヶ瀬組の人々は、この村上様から南を下西と称し（下西側からの天ヶ瀬組の呼称はない）、かつてこの地点より南、つまり三組の領域へ移住した者は、天ヶ瀬組の一員としての権利を剝奪するとの不文律があつたとい

う。これらの伝承から、村上様は天ヶ瀬と三組の領域を分断する一方で、西原を統合するシンボルの存在だったことが知れよう。

この村上様の隣の小祠は井場兵庫頭（長禄二年没）を祀るものである。兵庫頭は天ヶ瀬の井場家出身で

伯母峯峠に出没する妖怪「一本タダラ」を退散せしめた人物であり、天ヶ瀬のみならず、北山郷が誇る英雄として祀られているのである(後述)。

### (3) 集落と耕地・山林

天ヶ瀬の集落は国道一六九号及び行者還林道沿いの街村と標高七〇〇メートルの山腹に展開するいわゆる林隙集落との二つから成る。旧い集落は勿論後者であり、谷底から比高二〇〇メートルの南側の緩傾斜地に展開する。一方の日浦は天ヶ瀬組の鎮守社八坂神社を挟んで、東側の緩傾斜地に立地し、小字名もこうした立地条件に由来する。そうして先の村上様同様、八坂神社も天ヶ瀬と日浦の領域を区画しつつ、天ヶ瀬組を統合するシンボルとして、両地域の間地点に建てられているのである。

さて、住居は大抵平家で高い石垣の上に建てられ、元のソギ葺・杉皮葺の屋根はトタン葺となっているが、散村式に分布しており林隙村の特徴を保っている。即ち住居の周りに小さな畑「ソノ」が広がり、住居―ソノが一つのセットとなつて何軒かが集まりサトを形成している。従つていわゆる村境は不明確である。そしてサトの周辺に広大なヤマ(山林)が展開する構造を持っており、平地農村(集村)のムラーノラーヤマなる同心円構造と趣を異にする。また、

菜園としてのソノと耕地としてのノラ、商業的林业の対象地としてのヤマと採草地としてのヤマというように、山村と平地農村ではその持つウエイトも異なっている。天ヶ瀬の耕地といえは畑であり、水田は岩本家のみ高田和に四反ほどと奥玉の船の平に六反ほど所有し、また苗代田として西の原を用いていたが、生産性も低く、米の購入が容易となつた昭和三十年頃山林へと用地転換された。一方天ヶ瀬の畑地はソノとヤマバタとに分けられ、ソノで様々な野菜を栽培しているが、その所有面積は一戸一反に満たない。またアラクなる呼称は開墾したヤマバタをさし、同じヤマバタでも切替畑をハナシと称している。上北山村といわず吉野山地における切替畑は大正期をもつて終焉したが、戦時中に一時復活した。その場合でも、ハナシを行なう場所は必ずしも共有地とは限らず、ジアケを手伝うという口約束、あるいは杉苗や収穫物の一部を礼として渡すという前提で私有地を借用して耕作した<sup>34)</sup>。なお、宝泉寺裏手に郷倉があるが、アワ・ヒエ等を保存していたが、これは共有山を借りた者が供出していたもので、そうした最低限の義務を果たせば共有地におけるハナシは自由にできたのである。なお、この郷倉の穀物の用途については全権を総代にゆだねられていたという。当然救荒時に用いられたものと思われるが、サトにおける耕地の狭さと生産性の低さをヤマの広さとその相対的に自由な使用権が補つて余りあるもの

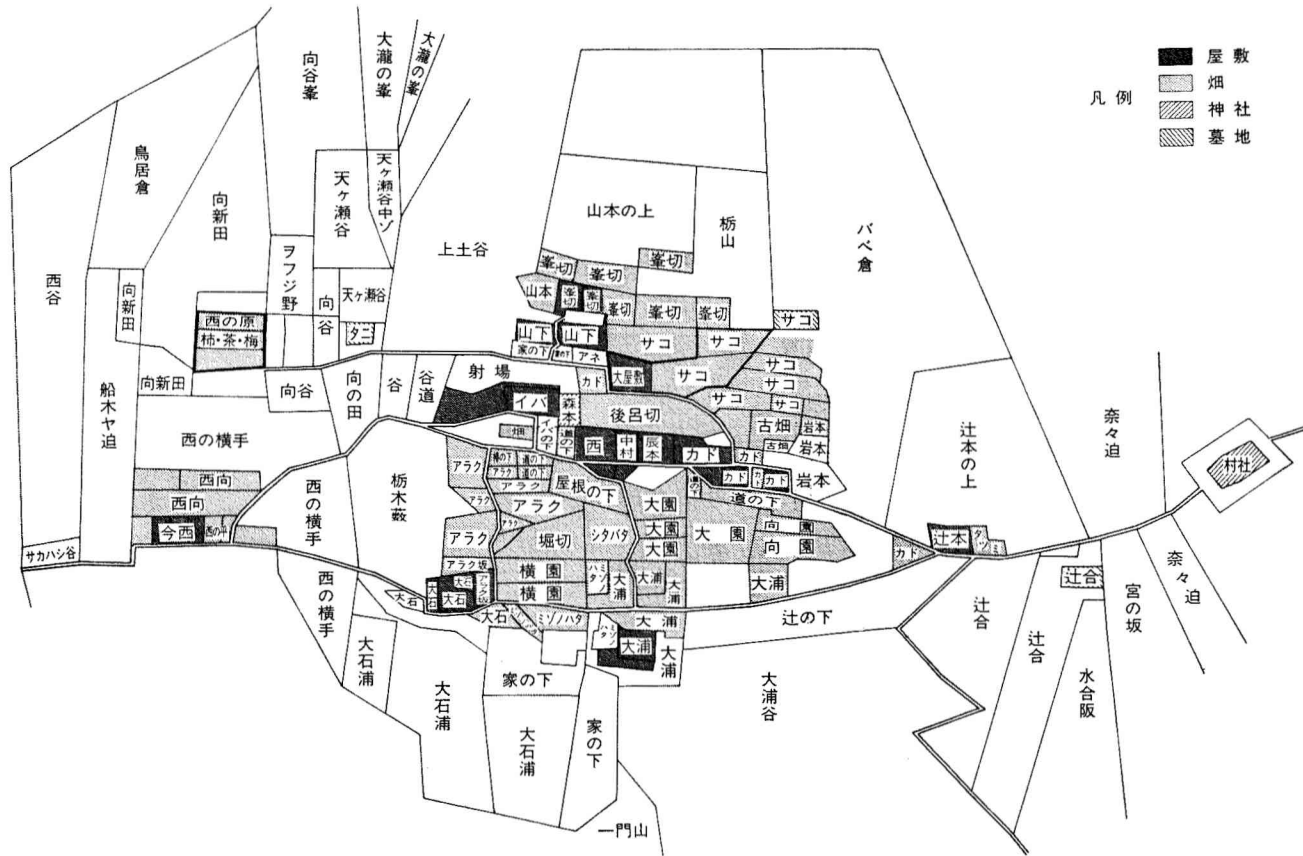


図2 天ヶ瀬におけるサトの地名と土地利用（昭和25年頃）



写真3 岩本重男家住宅及び畑（昭和57年撮影）

て生活を送っていた岩本家の住居（寛保年間創建？）と耕地の使用状況を紹介することしよう（昭和五十七年七月段階のもの）。

住居は、石垣を積み上げて整地した狭い敷地に主屋と便所・風呂の別棟を建て、背面は高い石垣となっている。主屋は元来四間取りで、一方の土間は白部屋や台所となるが、平地の民家と異なって狭く、桁行一間半余り、前が白部屋、後が台所となる。白部屋にはイ

があり、またヤマはサトであぶれた生活者あるいは漂泊者を吸収しうる、極めて包容力に富んだ空間といえる。とはいえ、急斜面を利用した耕作は農業経営にとって限界を与え、その発展を阻んでいくことはいうまでもない。

さて、ここで最後まで天ヶ瀬に留まっ

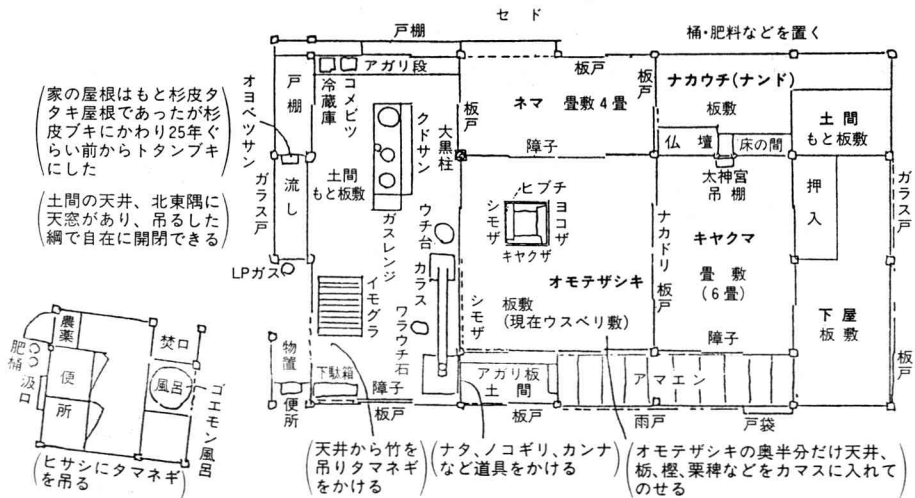


図3 岩本重男家間取り

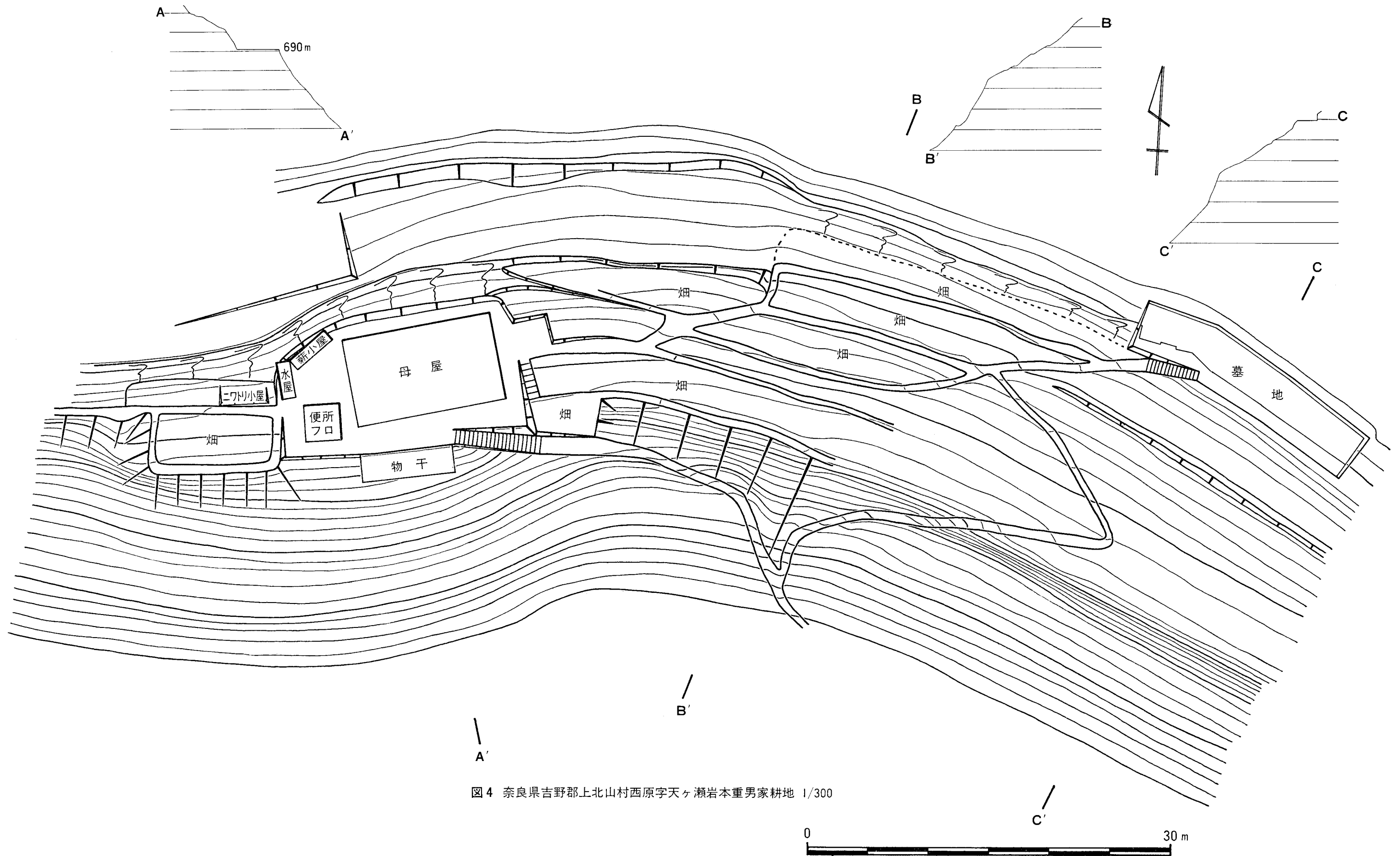


図4 奈良県吉野郡上北山村西原字天ヶ瀬岩本重男家耕地 1/300

モ等を貯蔵する穴を掘り、カラウスを据えている。台所は一部板張りにして荒神・水神・エビス・大黒を祀っている。臼部屋に隣る間にはオモテザシキと呼ばれ、八畳間の場合が多く、かつてイロリがあって板敷であったが、現在はウスベリ敷となっている。オモテザシキの奥半分のみ天井となり、栃・樫・粟・稗等をカマスに入れて保存できるようにしている。オモテザシキに並ぶ間はキヤクマと呼ばれ、六畳の畳敷で、この間の背面に床と押入れを並べ、押入内に仏壇を祀っている。仏壇と床の間に神棚があって、大神宮と氏神を祀る。オモテザシキの後方はネマであり、その隣のナカウチは物置として用いている。下屋部分は後増築したもので、ここも物置に使っている。主屋の屋根は切妻造で昭和三十年頃杉皮葺からトタン葺に替えた。この岩本家は地名大屋敷なる場所にあつてサコ及びカドにあるソノに囲まれている。その面積およそ五畝（この他西の原場所に四畝強畑を持っていたが植林してしまつた）、ダイコン、ニンジン、トマト、キュウリ、小豆をはじめ約二〇種余りに上る野菜類を所狭しと栽培し、畔や空地に茶の木を植えている。基幹作物と呼べるものは存在せず、自給用に好きな作物を、思うがままに栽培している模様である。主食の米を購入でまかなえる現代生活の余裕の表われともいえるが、こうした耕作方法は、水利慣行をはじめとして村の規制にとらわれざるをえない稲作と異なる、畑作の一つの

特徴ともいえよう。いずれにしても天ヶ瀬における農耕は自給的なものでしかなく、労働力の大部分は山林による生産に投ぜられてきた（この点については小川直之氏が触れている筈である）。

ところで、この岩本家も主人の病氣と一軒だけ取り残された不安から、ついに村上様を超えて下西へと下つてしまつた。下西の土地は知人を介して購入したのだが、ソノを作るスペースもなく、岩本家は完全な現金経済の中に巻き込まれてしまつた。なお、天ヶ瀬の耕地は荒れるにまかせ、家屋も放置されたままだが、この家屋は、盆の墓詣りの折あるいは八坂神社の祭り等において重要な役割を今でも果たしているのである。この点については後述する予定である。

#### (4) 道路の敷設と民俗の変容

山村であるということは、必ず交通条件の不利といった宿命を負うている。商業的林業が早くから発達したこの地域では、いやおうなしに外社会との交渉を持ち、その影響を受けてきた。また、思いの外頻繁に人の往来と他処者の定着が見られたが、しかし生活空間としての隔絶性は否めず、かなり長い間それが持続してきた。それ故、道路の敷設・整備にかける村人の思いにはなみなならぬものがあつた。

古くは北山郷より奈良盆地方面へ通ずる道は二つあって、一つは



伯母峯道、他は大峯越(天川道)と称しており、慶長年間より前者が主要道路になったといわれる。<sup>(35)</sup> その伯母峯道について享和二十一年(一七三六)刊『與地通志』幾内部大和之國に次のように記されている。<sup>(36)</sup>

伯母谷路 上市至西河二里五町所歴日宮、瀨日、菜、橋、日、樫、尾等 西河至

和田四里許所歴日大瀨日寺、尾日人、知、日井、戸日白川、渡等 和田至中根、辻堂、四里

二十一町經柏木、伯母谷 辻堂至小瀨二里有半小瀨至白川一里十

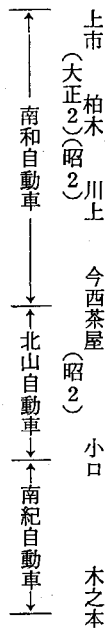
九町經橋本、河合 白川至三池、原二里二十六町池、原三至桑、原、屬邑川、

口二里五町牟婁郡界、謂之、小口越、上市至此、外通、桃崎、通計十九里、十二町

当時の伯母峯道(東熊野街道・戦後国道一六九号線)は今の伯母峯峠(九九メートル)の鞍部を通らず、川上村伯母峯より少し左寄り伯母峯(一二六七メートル)付近を越え、辻堂山の横をからみ、北山川の東、小椽川との中間の尾根を伝わって南下し、西原、河合、小椽に分かれて下ったものである。このように尾根伝いの道を用いたのは河谷が深く、河川も荒れ川で、谷底近くに道がつけにくかったためである。江戸末期になって現在の伯母峯峠を越える新道ができた。そうして明治十四年に至り、ようやく伯母峯より北山

川沿いに南下する道が貫通した。この道は天ヶ瀬の日浦を経て天ヶ瀬川合流点に下り、その後河底に近い右岸伝いにほぼ現在の街道と同じく河合、白川方面へと通ずるもので、これによってようやく外界との交渉が容易となった。この道も明治四十年村民による物心両面の多大な犠牲を払って大改修し、県道となった。この改修により、日浦を通り天ヶ瀬川合流点に急坂を下った道は、日浦の下方を通る緩やかな道につけ替えられてしまったのである。<sup>(37)</sup> その結果馬による荷車の通行も可能となり、便利この上ないものとなった反面、日浦・天ヶ瀬側から見れば幹線から取り残されることとなり、下西への移転も実はこの頃から徐々に始まるのである。

また、大正の末年から奈良県に自動車普及し始め、上北山村では早くも昭和二年から北山自動車による自動車の運行を見た。その運行年代は次のごとくである。



この北山自動車は当時村長を務めていた中岡利一氏の経営によるものだった。<sup>(38)</sup> このような山村で容易に自動車の普及をみたのは、資本力はいうに及ばず、商業的林业を軸とする生産関係の中で育まれてきた、都市的職業に従事する人々に近いパーソナリティ、即ち進

取の精神、ドライさ、スマートさ等々が一つの要因となっていると思われる。こうしたパーソナリティはまた、過疎化・近代化に対して農民のそれとは違った対応を示したのではないかと予想されるのである。

さて、こうして自動車の運行をみたが、伯母峯峠付近の急坂と急カーブ、そして冬の積雪がネックとなっていた。しかし、それも昭和十五年の伯母峯トンネルの開さくによりようやく解消され、さらに昭和四十年の新伯母峯トンネルの開設によりスピードアップが図られ、吉野山地縦貫交通は極めて便利なものとなった。この新伯母峯トンネルの開設は、いわゆる高度経済成長を背景として進められたもので、これによって成長経済下の労働需要・物資の流通等を受け入れる基礎が出来上がったといつてよい。そうして外社会の刺激を直に受けて、ムラの社会生活も急激な変容を余儀なくされていくのである。一つにはムラで働く人が減少し、その結果ムラの機能のあり方を根本的に変えてしまう。それに伴って、家同士、人間同士の関係も各戸中心主義、個人主義的なものとなり、ムラの統合も弱まってくる。また、新たな消費物資の流入はムラ人を現金経済へと巻き込んで経済生活を著しく変化させる。そうして現金収入の可能性を職種への転換、相互扶助における金銭のやりとりへの変化、家計簿に占める交際費の率の増大等々社会生活も変化せざるをえない。一般

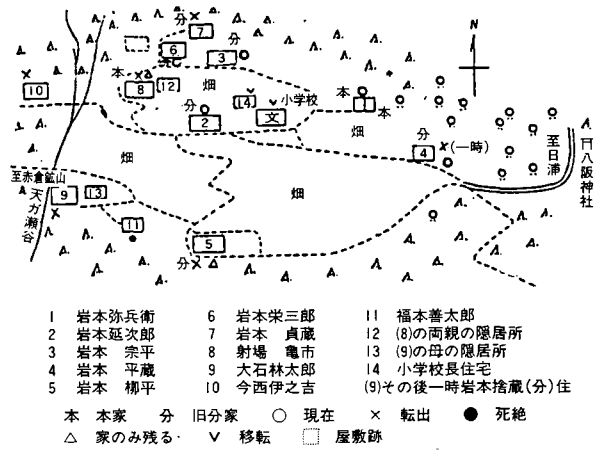
的に道路の整備はそうした意味合いを持つものといえよう。国家的経済の渦に巻き込まれ、天ヶ瀬もこうした流れとも無縁ではありえなかったが、一方では独自の対応を示したことも確かなのである。

#### (5) 下西への移転

過疎山村における山腹、山麓線地域から道路沿いの住居への移転傾向はつとに報告されていること<sup>39)</sup>である。また、西原の三組地域における国道一六九号線への集中についても、先に触れた通りである。消費物資の購入と交通の便、そして社会的動物としての密集志向が道路沿いへと集中せしめる。明治末の幹線のつけ替えに始まる日浦、天ヶ瀬の下西への移転も、おそらくそのことと無関係ではないだろう。勿論合わせて一七戸余りでは、ムラとしての社会生活を維持するには規模として小さすぎるし、生産性の低さも下西へと追いやる要因といえるが、幹線のつけ替えが一つの契機となったことは確かである。

さて、明治末の天ヶ瀬は戸数一一、日浦六、昭和三十七年同七と四、そして昭和五十八年に両地域とも〇となった。今明治末に存在した人家の移転先を見ると、西原へ八戸、天ヶ瀬橋(国道沿い)一戸、東の川一戸、八木等県内一戸、県外二戸、不明二戸、断絶二戸となっている。もはやこの時点では「村上様を超えたら天ヶ瀬組の

小字天ヶ瀬 50年前(明治末、大正初)の人家分布図



小字天ヶ瀬 現在(昭和37年)の人家分布図

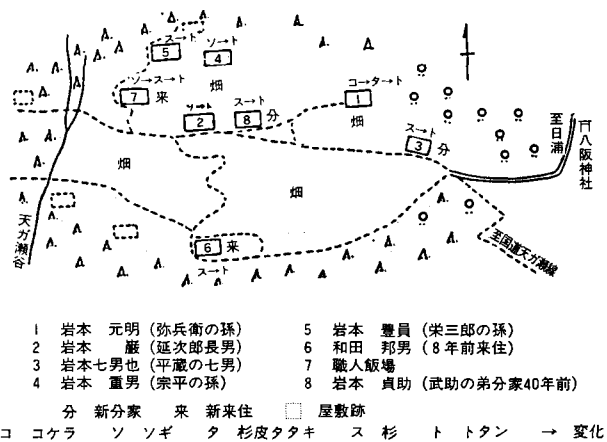


図5 天ヶ瀬における住居の変動

従い組有財産及営造物を共用する権利を有し、組の負担を分担する義務を負ふ。但し組内のもの新に一戸を構えたるときは、女子の分家及其の他の者は拾年内同一の利益を享有することを得ず。

と記されている。つまり、次男・三男の場合天ヶ瀬組に分家を出して二年後に株を得、一軒前として扱われる。

一方長男の場合、父親のインキヨを契機に長男に株を譲る。この場合もインキヨ届を組に提出する。インキヨは息子が嫁をもらうと次男以下を連れてインキヨ屋へ移るものである。また、一時他出している、その旨届け出れば天ヶ瀬組への復帰も可能のようである。

ところでこの天ヶ瀬組の一員としての権利・義務とはいかなるものであるか。天ヶ瀬組は約七六四町の共有林をベースに昭和三十二年財団法人天ヶ瀬組を創立し、また和佐又スキー場の経営を行な

権利・義務を喪失」するといった不文律も、「西原を超えたら云々と変えざるを得ない状況に置かれていたといえる。言い方を変えれば、現在でも西原に住む限り天ヶ瀬組としてのつき合いをしなければならぬ」ということにほかならない。現在天ヶ瀬組に属する世帯約二六戸、下西のあちこちに分散して住居を構えている。明治四十五年制定の天ヶ瀬組條例第式條に

本組内に本籍を有し、居住を為す者を以て住民とし、本條例に

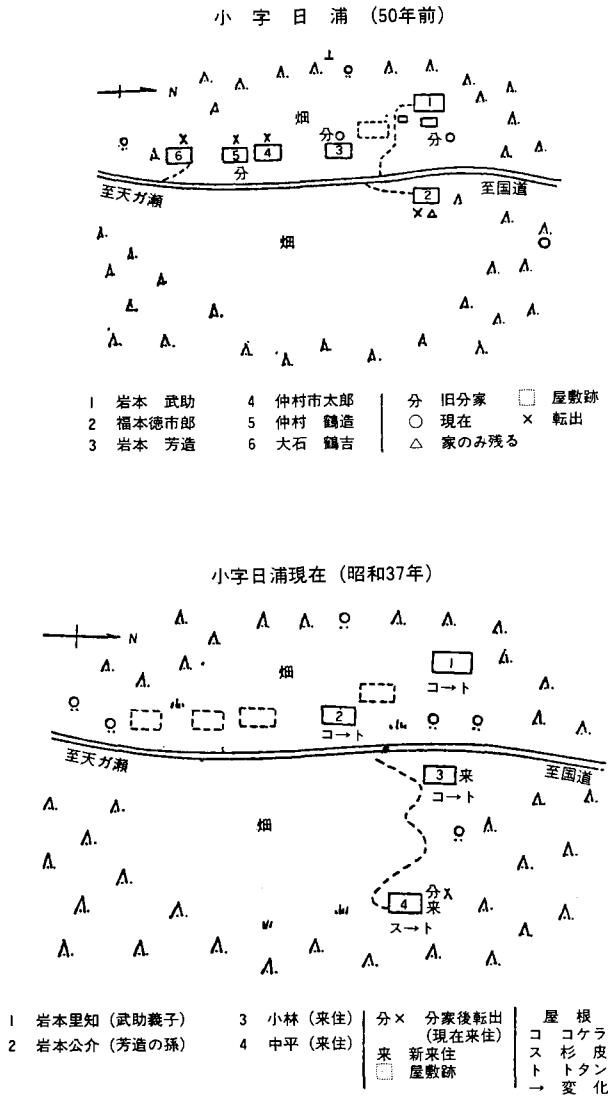


図6 日浦における住居の変動

つ共有林を背景に(三組も一

とにも独自の鎮守を持ち、か

てみると、天ヶ瀬組及び三組

婦属意識と組へのそれを比べ

る。しかし、大字への一体感・

ルとして機能していたといえ

上様同様、村落統合のシンボ

とのことであり、宝泉寺も村

で行なっていた(今は会所)

に、村の総会は宝泉寺で行な

である。もう一つ面白いこと

日の薬師まつりと盆行事程度

っている。この両者の収益による老齢年金(七〇歳以上、月一〇〇〇  
 円)高齢者祝賀金の贈呈、小中学生への修学旅行補助金給付(各々六  
 〇〇〇、一〇〇〇〇円)、万年講(伊勢講)、吉祥講等の代参経費の  
 給付、八坂神社祭礼経費の補助(昭和五十四年度約二四万円)が主た  
 るものであり、<sup>(40)</sup>組員の与れる権利といえる。かつては山林伐採によ  
 る収益を分けたことも、結婚祝いとして戦前一〇〇〇円を支給する余  
 裕さえあったといわれる。一方の義務としては、春の杉苗植え、夏の

山林の下刈り、秋のカズラ切り、カサギ(障害木)等の総出、家普請の  
 総出等々であり、出不足料は初寄合の時決めておくという。勿論西原  
 区(区有林五〜六〇町)としての総出、下草刈り、溝サラエには別途  
 出なければならぬ。天ヶ瀬組は下西地区に分散して住居を構えて  
 も、独自の総会を開き、祭りや講行事を執行するなど組独自のつき  
 合いを続けている。天ヶ瀬組と三組がともに行なう儀礼は、共通の  
 檀那寺である宝泉寺(曹洞宗)における一月七日の初祈禱、四月八

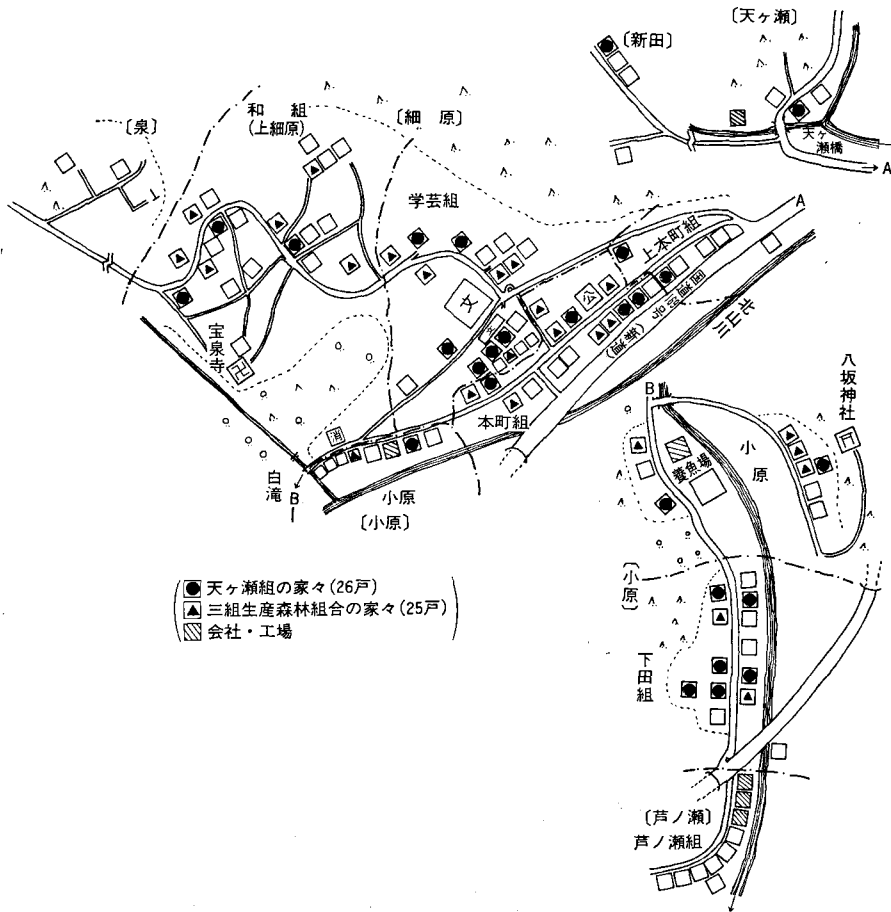


図7 西原の財団法人別住居分布 (昭和58年11月)

三五町余りの共有林を有する) それぞれの社会的慣行を保持しており、組への一体感、帰属意識の方がより根強いといえる。その精神的バックボーンとなるのが、鎮守の祭祀であることはいうまでもない。天ヶ瀬の信仰伝承について、八坂神社の祭祀を中心に次節で検討を加えることにする。

(6) 天ヶ瀬組の祭祀・信仰

近世から近代にかけ、交通の難所伯母峯峠が三度にわたって道路の改修をみたことは先に触れた。この峠には古来万象日限り地蔵が祀られており、道路の改修毎に都合三度この地蔵も移転した。この地蔵には次のような伝承が伴っている。

伯母峯峠には一本タダラなる妖怪が出没し、道行く人を喰うと信じられていた。ある時、天ヶ瀬の射場兵庫頭なる人物が犬を伴っての山狩の折、背に熊笹を生やした猪を射止めた。幾日か後、紀州湯の峰温泉に入湯する者があり、宿の主人に呼ぶまで決して戸を開けるなといって寝込んだが、夜中にイビキがひどく、つい主人が約束を破って

部屋を覗くと八丈の間一杯に背に笹を生やした猪が寝ていた。翌朝兵庫頭に撃たれた猪の亡霊は、「見るなというのに覗いた、もし天ヶ瀬にある鉄砲と太郎なる犬を盗んで連れてきたら許してやる、ただし他言無用」といって去った。結局この申し出は聞き入れられなかったのだが、その主人は何年か後についてそのことを口に出してしまい、間もなく発熱して死んでしまった。その後猪笹

王の亡霊は一本タダラなる妖怪と化し、伯母峯を通る旅人を喰い始めた。たまたま美濃の丹誠上人が通りかかり、地蔵を勧請して妖怪を封じ、経堂塚に経文を埋めてその難を避けることができたという。ただし、毎年十二月二十日だけは一本タダラの自由に任す条件だったので、今でも「果ての二十日」は伯母峯の厄日として警戒されている。

かつてこの地蔵堂は峠にある新茶屋の番を兼ねて、西原・河合・白川・小椽の人々が交代で守をしていた。つまり上北山全体の入口を守る神仏として祀られていたのであるが、西原の村境（地籍境）を守る神仏でもあった。この他西原の村境（この場合も地籍境）を守護する地蔵は二昧ある。一つは伯母峯から辻堂山を経て、北山川・小椽川の間の尾根伝いの道の西原へと下る分岐点にあり、もう一つは国道沿いの河合との境、河合峠に祀られている力地蔵である。昭和の初期道路工事で生理めになった力なる人物の供養に建てたもの

とされる。なお、日限り地蔵については、母乳が出なかったり乳が張って難儀した時、洗米を供えて目を限って祈願するとかえられるといわれる。現在祭礼は四月と十月の二十四日、天ヶ瀬組が中心となって祀っている。

一本タダラの他この地域における妖怪は、テング、ヤマンバ、ダリ<sup>(42)</sup>、カマイタチ等<sup>(43)</sup>が出没した。テングは男で鼻が高く大峯周辺に現われ、一方のヤマンバは女で大台ヶ原周辺を根城とし、またダリは峠付近・坂道、カマイタチはサト周辺と面白いことに妖怪の棲息領域もほぼ定まっているように思われる。

ところで、西原の祭祀対象物は先に述べたように、西原を囲むように三ヶ所の村の入口に境界神としての地蔵が祀られ、天ヶ瀬組と三組には各々鎮守があり、両地域の間地点に村上様が配置されるという形をとっていた。一方天ヶ瀬組についてのみ見れば、日浦と天ヶ瀬の間地点に鎮守社八坂神社が、あって、その隣接地に庚申と不動が祀られている。庚申は天ヶ瀬と日浦が一緒になって講を作っており、輪番で宿を務めて祀っていた。一方の不動は、十一月の神社の祭の時にお供えをあげ、行者（天ヶ瀬にも数人いたといわれる）が不動経を唱えて祀るものであった。この不動は鑄造で元は笹の窟<sup>(41)</sup>にあり、一度盗難に逢ったことから戦後持ち帰ったものである（笹の窟には代わりに石の不動を祀った）。

また墓地は六ヶ所(天ヶ瀬・日浦各三ヶ所)あってサトの上手、山際に沿ってほほイッケ毎にまとまっている。天ヶ瀬では岩本イッケのそれと今西・井場の墓地二ヶ所あり、もう一ヶ所は鎮守社の裏手にあってこれをムラバカと称している。このムラバカは赤倉鉾山(大正期から昭和三十年頃まで操業)、道路工事等に従事した他処者やムエンボトケの埋葬を天ヶ瀬組として行なうための墓で、これも土葬である。なお、以前は三回忌をめどに個人毎に石塔を立てていたが、最近は累代墓として建てられる傾向にある。

さて、問題の天ヶ瀬組の鎮守社八坂神社の頭人祭りに移ることにしよう。

八坂神社の祭礼は春六月十五日と秋十一月二十七日の二回あって(但し、五年前、各々五月三日と十一月三日というように、サラリーマン化の著しい現代に対応して休日に変更された)秋祭りが頭人祭りといわれるものである。頭人は毎年一人、男子が年齢順に務め(養子も同様)、天ヶ瀬組では頭人を務めないと分家しても組員として認められないといわれる。頭人は組の総会の折決められるが、ブク(黒不浄―一年間)の時は遠慮する。「秋季祭典者名簿」昭和二十七年に頭屋となった新谷要範氏によれば、二七歳の時頭人となり、彼は既に下西に下っていたので天ヶ瀬の親戚の家を借り受け、遷宮とも重なったので一週間祭りを行なった。三〇軒近くある天ヶ

瀬組の家内中を呼んでふるまい、一俵半の米を食べ尽くしたといわれる。頭人祭りは必ず天ヶ瀬の土地で行なわれるもので、それ故下西へ下ってしまった後も、家屋をそのまま残しておく家が多かった。廃虚と化した現在でも盆の墓詣りや祭りの時は、こうした家々に他出した家族も集まり一時的に天ヶ瀬地区も賑やかさを取り戻す。下西に移った天ヶ瀬の人々にとって、元の土地は祖先祭祀を介して、家族同志の絆を確認し、八坂神社の祭祀を通して組員としての紐帯を強化する空間にはかならないのである。

さて、祭りの日程は十一月二十五日が米洗い、二十六日は御供搗きと宵宮。御供搗きは組の若い衆が搗く。御供搗きも料理づくりも(結婚式・葬式の時も同じ)必ず男が行なう。御供餅はヒネリ餅(厚さ一センチの丸餅)とカサネモチとの二種類あって、前者は本祭りのミゴクザの時各家に三枚ずつ配るもので、後者は小宮(山の神)、庚申不動も含めて神前に供えるものである。この他、神主と年老(宮守)が床の間に置く御幣と神を用意し、またイタドリなるものを作っておく。イタドリとは竹一節に蒸したタダ米(ウルチ米)と酒を入れて一对を藁で結んだものである。こうして準備が完了すると宵宮となり、一番座―戸主のみ、二番座―男性、三番座―女性・勝手もと、の順に本膳をいただくのである。また翌日の本祭りではミゴク座に先立って頭屋渡しが行なわれる。そして頭人を上手

に、左右の上手に前頭屋と後頭屋が対峙し、以下役員、そして年齢順に戸主が並び、ミゴク座に移る。ミゴク座では、宵宮の時に作って床の間に供えておいたイタドリを戸主に渡し、戸主はそれを割っていただく。普通の年は一ニカケ（閏年は一三カケ）作って元々隣の家同士分け合っていたが、やがて家数だけ作るようになり、さらに家族を含めて人数分だけ作るようになったものである。

天ヶ瀬組の頭人祭りは、天ヶ瀬という土地でしかも組内全員が参加し、頭人を務めて初めて組員として認められるといった点に特徴があった。財団法人天ヶ瀬組の存在が下西を越えた地域への流出に一定程度の歯止めをかけ、また組員を統合する経済的基盤とすれば、八坂神社の頭人祭りは、下西へ下って分住する組員を統合する精神的基盤といえることができる。

#### 四、結びにかえて

以上、民俗変容を捉える際の分析指標として、(1)生態的視点、(2)社会的視点、(3)宗教観・意識構造の三つを設定し、奈良県吉野郡上北山村西原字天ヶ瀬の分析を試みた。

西原は天ヶ瀬、日浦、泉、細原、小原の五集落から成り、前二者を天ヶ瀬組、後三者を三組と称している。天ヶ瀬組と三組の集落は

表1 人口及び戸数変化

	西 原				河 合			
	戸 数	男	女	計	戸 数	男	女	計
明 治 9 年	53戸	147人	140人	287人	56戸	147人	130人	277人
昭 和 35 年	134	273	246	519	165	323	322	645
昭 和 45 年	115	181	214	395	180	290	272	572
昭 和 55 年	107	148	179	327	205	242	239	481

およそ四キロ離れているが、天ヶ瀬地域を通過していた街道が明治末年につけ替えられてこの地域が幹線道路から見離された結果、三組地域への移転が始まった。そうして昭和四十年代の国道一六九号線の改修が決定的契機となり、天ヶ瀬地域は廃虚と化した。消費物資の購入と交通の便、そして社会的動物としての密集志向が、三組の道路沿いへと住居を集中せしめたといえる。結局のところ日浦・天ヶ瀬が下西へ下りて集落を再編成することによってある意味では過疎化を克服したといえる。ただし、天ヶ瀬組、三組ともに財団法人と神社祭祀を背景として大字よりも組への志向が強く、西原全体として地域生活の再編がなされたという訳ではない。一方では、西



原の過疎化が徐々に進行しているのであり、遅かれ早かれ何らかの対応が迫られると思われるが、現段階では助言しうる術を持ち合わせていない。

天ヶ瀬組の過疎への対応を見て気づくことは、道路の敷設を契機とする分散性居住生活から群居性居住生活への変化である。米山俊直の説く適疎社会がどの程度の規模と密度のものを想定しているか不明であるが、人間の群れ志向の強さだけは確認できた。その点について米山俊直は次のように述べている。<sup>(45)</sup>

生活のうえの不安という点では、若者たちよりかえってとり残されてゆく老人たちの方がはるかに大きいかもしれないのである。そしてその不安の根は―くり返すことになるが―経済的理由やものの格差、あるいは山住みの生活の不便さといったこと以上に、仲間のいないことに由来する面が大きいように思われるのである。マチの持っている魅力の秘密は、いわばその群居性にあるのではないか。ともかくたくさんの人々がそこに住んでいること、群衆になって動いていること、さまざまな姿や行動をとっているけれども、みんなが一緒に生存している事実、いわばその集住という現象自体が、人のまばらな山の生活から見れば、いいよりのない大きな魅力の根源なのではないだろうか。

筆者が一方では盛り場をフィールドとしていることは先に述べた

が、実は米山が述べるような群居性の持つエネルギーと魅力にひかれたからである。<sup>(46)</sup> それはともかく、集落の再編が群居性志向の一つの表われとするならば、適疎社会とは一体どのような内容を伴うものなのか、早急に検討を要する問題といえよう。<sup>(47)</sup>

集落の再編が過疎化への対応策として一定程度の有効性を持つとするならば、そうした作業を通して何らかの提言ができうるのではなからうか。

なお、過疎化と民俗変容に関する方法論、という点からいえば今回は態勢の不備から、集落の移転・再編に終始し、先に掲げた分析指標は充分活用しきれなかった。その有効性如何についても折をみて検証していくつもりである。

#### 註

- (1) 「ふるさと小包好調」、一九八六年八月一五日付毎日新聞朝刊による。
- (2) 坪井洋文はこうした都市人の故郷志向について「日本の村は人的資源にしても、生活資源にしても、それを都市に供給し続けてきた。都市へ出て生活する者にとって、村という故郷は常に自分の精神領域の奥深くに息づき、故郷と接することによって自分の再生、秩序化をはたすことを可能にしてきた。また死後の不安についても、故郷は自分の帰属する他界として、現世に生きる者の心の安定を約束してきたのである」との都市・過密―農村・過疎を見据えたすこぶる示唆的な見解を述べている(坪井洋文「故郷の精神誌」『現代と民俗―伝統の変容と再生―』日本民俗文化大系十二巻所収 一九八六年小学館)。
- (3) 「交通公社の『杜の賑い』バック」、一九八六年五月二一日付毎日新

- 聞夕刊による。
- (4) 「広がる山村留学」、一九八六年六月一日毎日新聞夕刊による。
- (5) 齊藤吉雄「コミュニティ再編成の研究」お茶の水書房 一九七九年。
- (6) 大分県を震源とする「一村一品運動」はあつという間に全国の農山漁村に広がったが、一つのブームとして必ずしも好ましい結果をもたらさず急速に冷めつつあるといわれる。(ふるさと農業研究会編『ザ・村おこし』富民協会 一九八六年。
- (7) 「演劇がムラを変えた・富山県利賀村」一九八六年七月一〇日付毎日新聞夕刊、「今年もペフォーマンス祭・メッカ福島県檜枝岐村で三たび」、一九八六年八月二一日付毎日新聞夕刊。
- (8) 池上徹『日本の過疎問題』東洋経済新報社 一九七五年。
- (9) 拙稿「盛り場の景観と時間」(坪井洋文編『日本人の民俗的時間認識に関する総合的研究』国立歴史民俗博物館刊 一九八六年)。
- (10) 山口弥一郎『過疎村農民の原像―南奥羽の民俗を追って―』潮出版社 一九七二年。
- (11) 桜田勝徳「現代における民俗変貌への対処の立場から」(『日本民俗学大系』2巻、平凡社 一九五八年)。
- (12) 昭和五十五年大塚民俗学会年會シンポジウム「民俗の変貌をめぐって」(『民俗学評論』20・21合併号 大塚民俗学会 一九八五年)。
- (13) 高桑守史「過疎と民俗の変貌」(宮田登・福田アジオ編『日本民俗学概論』吉川弘文館 一九八三年)。
- (14) 前記シンポジウムにおける桜井徳太郎の発言による。ただし、文化接触といっても異民族とのそれをさすものではなく、一つの生活集団がそこで持続的に生活を展開することによって生まれた文化が、他の生活集団のそれと接触した場合を想定している。
- (15) 富田祥之亮「民俗事象の変化とムラの構造」(『民俗学評論』25号 大塚民俗学会 一九八五年)。
- (16) 成城大学民俗学研究所「山村生活五十年、その文化変化の研究」一九八六年。
- (17) 富田祥之亮前掲論文。
- (18) 社会論的過疎と経済論的過疎を合わせて地域論的過疎といい、人口論的過疎が地域論的過疎をひきおこす、との捉え方もある。
- (19) 堀井甚一郎「紀伊山地・奥吉野地方の地理的変容」(『奈良文化論叢』所収 一九六七年)。
- (20) 西野寿章「ダム建設にともなう水没村落の移転形態と村落構造」奈良県十津川村迫部落と福井県今庄町広野二ツ屋部落の場合」(『人文地理』33巻4号 一九八一年)。
- (21) 吉野地方に限っても奈良県教育委員会編『大迫ダム水没地民俗資料緊急調査報告書』一九六八年、同編『大滝ダム関係民俗資料緊急調査報告書』一九七一年等々がある。
- (22) 花島政三郎「水没による部落の解体・再編成と宮座」滋賀県神崎郡永源寺町愛知川ダム建設の場合」(『國学院大学日本文化研究所紀要』第21輯 一九六七年)。
- (23) 米山俊直『過疎社会』日本放送出版協会 一九六九年。
- (24) 『奈良県の地名』日本歴史地名大系第30巻平凡社 一九八一年。
- (25) 小椋 奥村隆昭氏所蔵『北山郷由緒書上組』。
- (26) この地域の製茶法は、春に新芽をとって大きい釜で蒸し、筵の上で採んだ上で日光で乾燥させ、袋に詰めて貯蔵しておく。使用する時は必要な分を炒って用いる。一戸当り七〜八貫の収穫はあったといわれる(奈良県教育委員会事務局文化財保存課編『上北山村の地理』上北山村役場一九六四年刊による)。この他自家製茶法として、摘み取った茶葉を熱湯の入った湯釜に漬け、それを筵の上で乾燥させて横槌で叩くというタタキ番地の製法のあることが知られている(奥野義雄「製茶法とその用具」奈良県立民俗博物館だより12号 一九七七年)。
- (27) 上北山村森林組合編『上北山の林業』同組合刊 一九七六年。
- (28) 「なすび伐り」とは、なすの実の大きいものから採取することになみ、大径木から抜き伐りする伐採法をいう。このなすび伐りの後の伐根付近に翌年補植し、一斉皆伐はほとんど行なわれず、保育的な除間伐、枝打も行なわなかった。もっぱら粗植で単木の肥大成長を主眼とした育林方法が昭和二十一年頃まで行なわれていた。

- (29) 木内信蔵編『都市・村落地理学』朝倉書店 一九六七年。
- (30) 堀井甚一郎『奈良県地誌』大和史蹟研究会 一九七二年。
- (31) 南北朝の対立も元中九年(一三九二)後亀山天皇が北朝の後小松天皇に譲位し一応解決をみた。しかし、北朝方の講和条約不履行に対し、応永十五年(一四〇八)の上野宮の挙兵をはじめに、同十七年後亀山上皇の吉野への御出奔があり、以後文明十年(一四七八)までの約七〇年間、南朝の復権運動が続けられた。これを後南朝と呼ぶが、北山に起こった長祿の変も、後南朝にまつわる事件にはかならない。
- (33) ただし、現在は八月第一日曜日祭日に、天ヶ瀬組の人達がめい／＼が祀りに赴くだけである。
- (34) ハナシは七、八人が組んで五年契約で借り受け、  
一年目―大豆・小豆・大根等  
二年目―アワ・ヒエ  
三年目―小豆・ヤナンバ(トウモロコシ)・マイモ  
四年目―雑づくり(ソバ)・マイモ  
といった輪作を行なった。
- (35) 奈良県教育委員会事務局文化財保存課『上北山村の地理』前掲書。
- (36) 蘆田伊人『大日本地誌大系五畿内志・泉州志』雄山閣 一九二九年。
- (37) 奈良県教育委員会事務局文化財保存課『上北山村の地理』前掲書。
- (38) 中岡利一氏の経営による北山自動車は、やがて不振に陥り、同じく小椋の福中清一郎氏が株を買ひ占め、大宇陀町松山の郡司自動車へ売却した。昭和十五年この郡司自動車と大阪軌道が合併して吉野宇陀交通となり、昭和十八年現在の奈良交通に吸収された。
- (39) 小木曾豊「深雪山山村における挙家離村とその要因」新潟県東頸城丘陵松之山町を例として(『人文地理』38巻3号 一九八六年)。
- (40) 昭和五十六年度の決算書によれば、特別寄付金総額四五六、七一〇円で、内訳は次の通りであった。
- 特別寄付(神社の祭礼)―二三一、七一〇円  
万年講―一三五、〇〇〇円 吉祥講―九〇、〇〇〇円
- (41) 大普賢に接する文珠岳の山裾に南面した岩窟で不動を祀る小堂があ

- る。大峯奥駈七十五驛六十二番の行場で、多くの修験者が窟籠りをした所である。
- (42) 特に伯母峯付近でよくダリにとりつかれるといい、実際死んだ人もいと伝えられる。ダリにつかれてもふつうは御飯を一口食べれば元気になる。手に「米」という字を書けば治る、あるいは弁当を食べても必ず数粒残しておかなければいけないとされている。
- (43) カマイタチに遭遇するとカマで切られたような痛みが走り、三ヶ月型の傷ができるといわれる。
- (44) 料理は大根ナマス、コンニャク・大根・シイタケ・マイモの煮込み、コンニャクの白アエ、キンピラ等であるが、大根の収穫期にあたり、大根料理が主となっている。
- (45) 米山俊直『過疎社会』前掲書。
- (46) 人間の生活空間は第一空間―住居、第二空間―職場、第三空間―自然志向(行業地)と群れ志向(盛り場)とに分けて考えることができる。ここで述べた山村の群居性(群れ志向)とは第一空間におけるそれである。
- (47) 神代は二〇〇戸、一〇〇〇人を理想的なコミュニティとしているが、純粹に生態的な視点からはじき出された数字であり、社会生活と関連つけて検証する必要がある(明大建築学科神代研究室編『日本のコミュニティ』鹿島出版 一九七七年)。